



A Garden of Roses, Watercolours by Alfred Parsons, RA

2018年12月4日発行

<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/index.htm>

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1

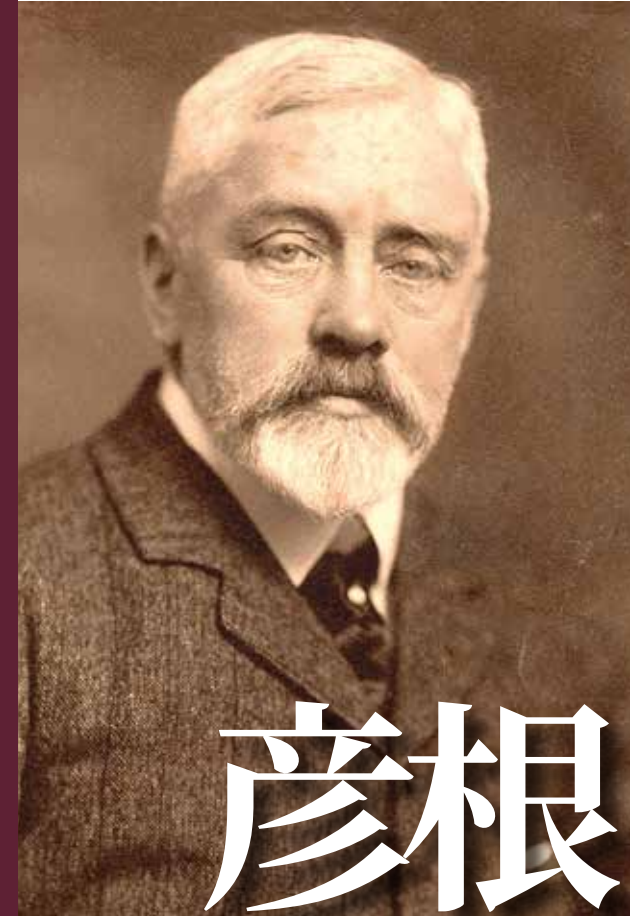
編集・発行：滋賀大学経済経営研究所

Alfred Parsons

彦根 米原 長浜

英国人画家

パーソンズが
明治中期の
描いた

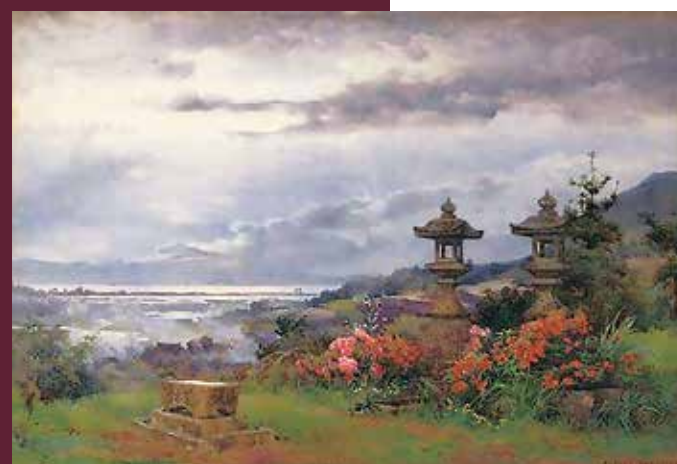


滋賀大学彦根キャンパス総合研究棟〈土魂商才館〉1階
しがだい資料展示コーナー

第1期 明治25年の彦根(Ⅰ) 一玄宮楽々園、彦根城、レンゲソウ畑、芹川での競馬、馬芝居
会期 2018年10月2日(火)～11月30日(金)

▶第2期 明治25年の彦根(Ⅱ)
一天寧寺、十六羅漢像、ササユリ
会期 2018年12月4日(火)～2019年1月31日(木)

第3期 明治25年の米原と長浜 一曳山祭、青岸寺、旅芝居の座長
会期 2019年2月4日(月)～3月29日(金)



英国人画家 パーソンズが描いた 明治中期の 彦根・米原・長浜

イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズ Alfred Parsons (1847-1920) は、1892 年(明治 25 年)に来日し、早春から晩秋にかけて日本各地を旅行しながら、日本の植物と風景を組み合わせた水彩画を数多く描いた。パーソンズは、のちに英国オールド・ウォーターカラー・ソサエティの会長を務めることになる画家であり、また庭園の設計家としても活躍した人物である。さらに、彼は、日本の美術界にとって、明治中期以降、三宅克己、大下藤次郎、丸山晚霞を初めとする日本の水彩画家たちに大きな影響を与えた点でも忘れることのできない芸術家である。

パーソンズは、明治 25 年の 5 月 19 日から約 1 か月間、彦根に滞在した。5 月末まで楽々園・地震の間に宿泊し、城山に登ったり玄宮園を描いたり、また、芹川で行われていた競馬や、街中で興行されていた馬芝居を見物している。その後、6 月 19 日まで天寧寺にホームステイして、境内や裏山で出遭ったツツジやササユリ、ノイバラなどの植物、寺から眺めた琵琶湖の夕景色などを描き、寺の家族とも親しく交流した。

秋には、米原に宿をとって青岸寺の庭を描いたり、長浜まで出かけて曳山祭を見物し、祭りの様子を詳細に記録している。

帰国後に発表した日本紀行文 *Notes in Japan* (単行本、1896 年刊)において、パーソンズは、彦根・米原・長浜のその当時の景観、そして人々の暮らし

などを、写実的な水彩画・スケッチと細やかな文章とで生き生きと描写している。

本展示では、明治中期における上記の 3 つの町の風景、植生、人々の生活ぶりなどを、*Notes in Japan* に多数収録されているパーソンズの精妙な画、また彼が綴った克明な文章、その他の関連資料によって紹介する。

展示は、以下のとおり、3 期に分けて行う。

第 1 期:「明治 25 年の彦根 (Ⅰ) —玄宮楽々園、彦根城、レンゲソウ畑、芹川での競馬、馬芝居」

第 2 期:「明治 25 年の彦根 (Ⅱ) —天寧寺、十六羅漢像、ササユリ」

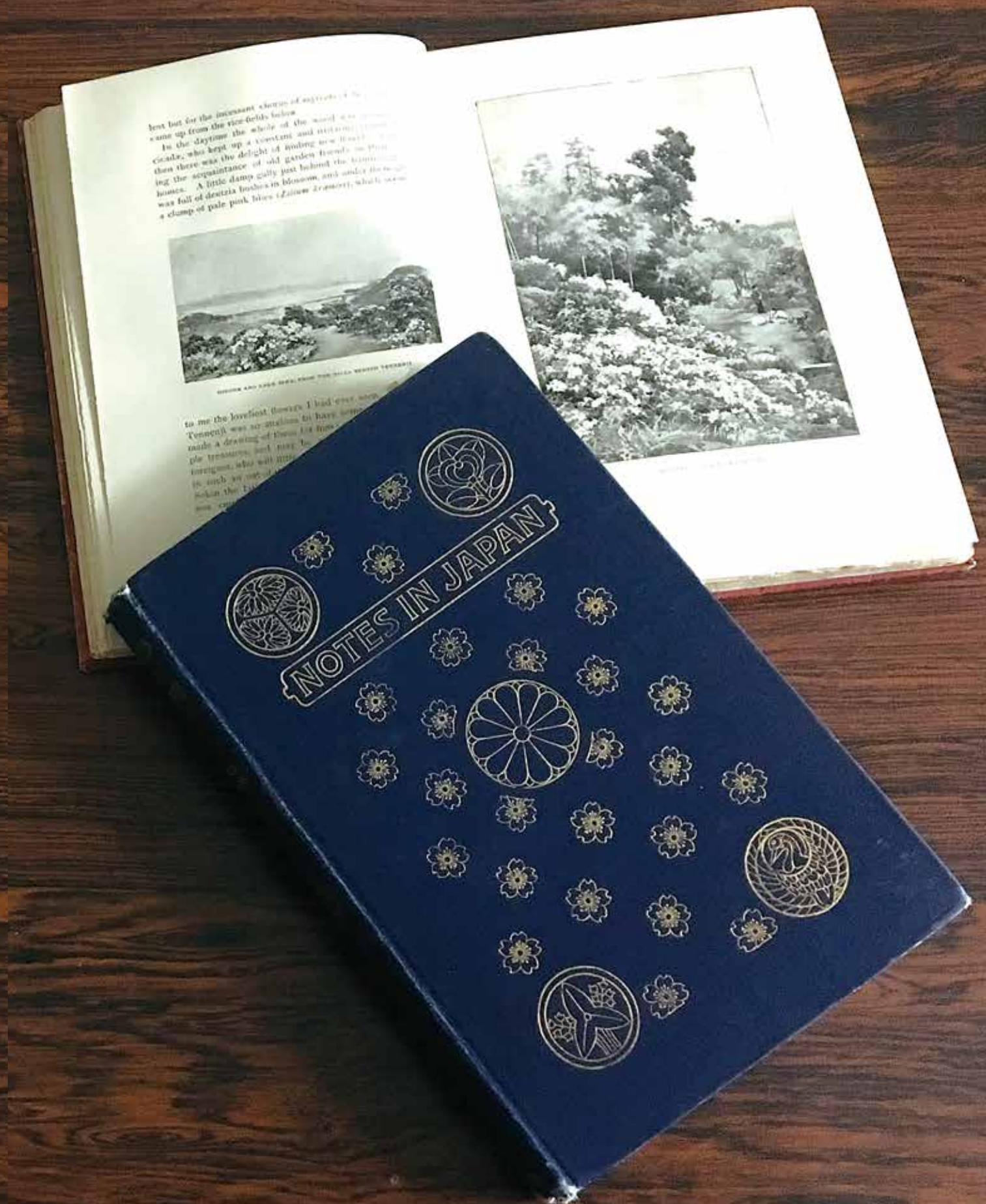
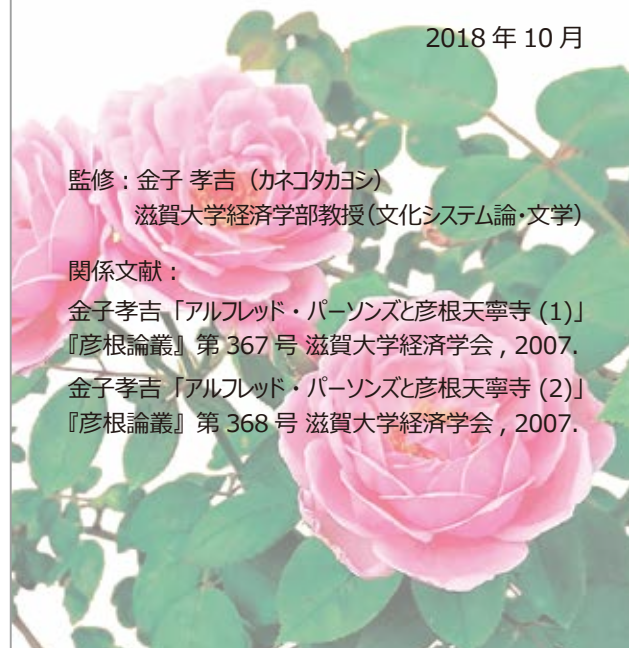
第 3 期:「明治 25 年の米原と長浜 —曳山祭、青岸寺、旅芝居の座長」

2018 年 10 月

監修: 金子 孝吉 (カネコタカヨシ)
滋賀大学経済学部教授(文化システム論・文学)

関係文献:

金子孝吉「アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺 (1)」
『彦根論叢』第 367 号 滋賀大学経済学会, 2007.
金子孝吉「アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺 (2)」
『彦根論叢』第 368 号 滋賀大学経済学会, 2007.



アルフレッド・パーソンズ

略年譜

1847 年 12 月 2 日	イギリス西部サマセット州ベッキントンで、外科医の父のもとに 14 人兄弟姉妹の第二子として生まれる。
1865 年 (18 歳)	ロンドンに出て、郵便局に勤務しながら、サウスケンジントン・スクール (美術学校) の夜学に通う。
1868 年 (21 歳)	英国美術家協会展に初出品。
1871 年 (24 歳)	ロイヤル・アカデミー展に初出品 (1874 年以降、亡くなるまで毎年出品)。
1882 年 (35 歳)	ニュー・ウォーターカラー・ソサエティの正会員になる。
1884 年 (37 歳)	ウスターシャー州ブロードウェイに、アメリカ人画家ジョン・S・サージェント、E・A アビー、F・D・ミレット、アメリカ人小説家ヘンリー・ジェームズ、文芸批評家エドモンド・ゴスらとともに芸術家コロニーを築く。
1885 年 (38 歳)	画廊ファイン・アート・ソサエティで個展を開く。
1887 年 (40 歳)	ロイヤル・アカデミー展に出品した作品「花笑い鳥歌うとき」が国家買い上げ作品に選ばれる (パーソンズの代表作の一枚となる)。
1891 年 (44 歳)	画廊ファイン・アート・ソサエティで個展を開催。 アメリカの雑誌『ハーパーズ・ニュー・マンズリー・マガジン』に挿絵を寄せる。 画家 F・D・ミレット、P・ビグローとともに、ドナウ河を旅する (このときの紀行文がミレット著『ドナウ河紀行』として、1893 年にアメリカのハーバー社から出版される。パーソンズは、ミレットとともに挿絵を担当)。
▶1892 年 (45 歳)	3 月～ 12 月にかけて日本各地を旅行。 初夏に約 1 ヶ月、彦根に滞在する。初めは楽々園に宿泊し、のちに天寧寺に移る。天寧寺では、住職の高木宗欽、妻・お茂、息子・喜三郎と親しく交流する。 秋には米原に宿泊し、長浜の曳山祭を見物したり、青岸寺の庭園を描いている。 11 月下旬にパーソンズの滞日作品展が東京美術学校で開催される。のちに日本を代表する水彩画家となる三宅克己がこの展覧会を見て、多大な影響を受ける。



1897 年頃のアルフレッド・パーソンズ (J.H. ローラー撮影)

1893 年 (46 歳)	ロイヤル・アカデミー展に作品「天寧寺の石仏たち」を出品。 画廊ファイン・アート・ソサエティで、滞日作品展「日本の風景と花の水彩画展」を開催する。
1894 年 (47 歳)	雑誌『ハーパーズ・ニュー・マンズリー・マガジン』に、この年の 6 月から翌年の 5 月にかけて、6 回に分けて日本紀行文 <i>Notes in Japan</i> を発表。
1895 年 (48 歳)	W・パートリッジ、C・タドウェイと共同で、庭園デザインの仕事に取り組み始める。
1896 年 (49 歳)	アメリカのハーバー社から、単行本 <i>Notes in Japan</i> が出版される。
1897 年 (50 歳)	ロイヤル・アカデミー準会員に選出される。
1898 年 (51 歳)	ロンドンのパーソンズ宅を三宅克己が訪問。
1903 年 (56 歳)	水彩画家・大下藤次郎の訪問を受ける。
1905 年 (58 歳)	オールド・ウォーターカラー・ソサエティ正会員に選出される。
1910 年 (63 歳)	著名な園芸家エレン・ウィルモットのバラ図譜 <i>Genua Rosa</i> (バラ属) の出版が始まる (パーソンズは同著内のすべてのバラの画を担当)。
1911 年 (64 歳)	ロイヤル・アカデミー正会員に選出される。
1912 年 (65 歳)	天寧寺の高木喜三郎と書簡を交わす。
1914 年 (67 歳)	オールド・ウォーターカラー・ソサエティ会長に就任する。
1920 年 (72 歳)	1 月 16 日、イギリスのウスターシャー州ブロードウェイで死去。

(谷田博幸「画家パーソンズが日本にみようとしたもの」、『100 年前に描かれた彦根—イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズの話』彦根景観フォーラム, 2007 をもとに作成)



FUJI OVER THE RICE-FIELDS OF SUZUKAWA



A LITTLE TEMPLE AT NIKKO

パーソンズの 日本旅行の足取り

1892 年 (明治 25 年)

3 月 9 日、長崎港に到着。その後、瀬戸内海を船で航行。
3 月半ばから、神戸に滞在 (神戸クラブ)。
4 月 13 日から、奈良に滞在 (宿泊先：菊水屋)。
4 月 25 日、吉野へ桜を描きに行く (宿泊先：たつみや)。
5 月 4 日、初瀬へ (長谷寺で牡丹の絵を描く)。
5 月 9 日、奈良へ戻る (宿泊先：菊水屋)。
5 月 19 日、奈良を発ち、宇治を経由して、彦根に夕方到着 (宿泊先：楽々亭)。
5 月末、宿泊先を天寧寺に移す。
6 月 18 日、パスポート更新のため、彦根を去り、神戸へ戻る。
6 月末、名古屋を経由して、鎌倉へ。
7 月 9 日、横浜を発ち、宇都宮を経由して日光へ行く。
8 月初旬、富士山に登頂する。
9 月初旬、富士吉田へ。甲府、諏訪を訪れ、中山道を通って妻籠へ向かう。その後、山越えて飯田へ。
9 月 16 日、浜松に到着。
9 月下旬、神戸に戻る。須磨、明石、有馬を訪ねる。
10 月 6 日、神戸を発ち、米原へ。
10 月半ば、長浜へ数日間通って曳山祭を見物。
10 月下旬、静岡から久能山、清水、熱海周辺を旅行。
11 月初旬、横浜に滞在。箱根を訪ねる。
11 月下旬、上野の東京美術学校 (現・東京芸術大学) で滞日作品展を開催。
12 月 10 日、横浜港から日本を出国。



The last of Japan



A TEA-HOUSE AT KAMAKURA



MI KOMORI JINJA, A SHINTO TEMPLE NEAR YOSHINO

第2期：
明治25年の彦根(Ⅱ)

— 天寧寺
十六羅漢像
ササユリ



It was a small Buddhist temple called Tennenji, once very popular but now almost deserted, which stood on the hillside beyond the rice lands, and somewhat above the swarms of mosquitoes which haunt the marshy shores and the lagoons of Lake Biwa.
A granite sign-post where the little temple path turns off from a track through the rice-fields tells all who can read it that the temple is dedicated to the five hundred Rakkan(disciples of Buddha), and their gilded and lacquered effigies sit in long tiers round one large building within the

court-yard; beyond this is the Hondo, where the principal altars are, and where the services are performed at daybreak by the old priest who has sole charge of the establishment. My room was a little annex of the Hondo, quite apart from the living-rooms of the family, and open on two sides to the air. The angle of my veranda projected over the fishpond, and on the right and the left stepping-stones led down from it into the garden, a small patch of level ground,

天寧寺—— パーソズ、五百羅漢のある寺へ移る

それは、^{*}天寧寺と呼ばれている小さな仏教寺院だった。かつては活気ある寺院だったようだが、今ではほとんど寂れているといってもよかった。寺は、広闊な稲田が尽きる所にそばだつ丘の斜面に建てられていた。琵琶湖岸沿いの湿地帯や点在する内湖のあたりでは、うるさい蚊の大群に悩まされるが、さすがにこの高台までは蚊もあまり多く襲つてこないようだ。〔*訳注：パーソンズは、天寧寺のことを「Tennenji」と誤つて書き記している。ただ、本紀行文中の別の箇所で、この寺の名が「平静と清閑と温和を表している」と書いているところを見れば、「天寧」の表す意味をまったく違つて理解していたわけではないとえる〕……

一面に広がる水田を貫く道の端に、花崗岩で出来た道標が立っており、そこから、寺へと通じる小道が分岐している。道標に彫られた文字を読める人であれば、その寺が「五百羅漢」(the five hundred Rakkan)、「仏陀の最高位の弟子たちに奉獻された寺であることが分かる。金箔に覆われたり漆を塗られたりした夥しい数の彫像が、中庭にある大きな建物の周りに階段状にしつらえられた壇の上に、整然と座していた。この建物の向こう側に本堂(the Hondo)が建っており、主祭壇はそこに置かれていた。この寺の管理をただ一人任されていた老住職はその本堂で、夜が明けるとともにお勤めをはたしていた。私が宿泊していた部屋は、本堂に付属していた小さな離れだった。部屋の二面が庭に向かって開かれており、住職一家が生活していた部屋とはかなり遠く隔たっていた。私の部屋に付いていたベランダの角は、魚が泳いでいる池の上に張り出していた。ベランダの角の右側にも左側にも踏み石が置かれていて、そこから、幾許かの広さの平坦な庭へ降りることができた。……



天寧寺の本堂
(2007年6月17日、経済経営研究所撮影)



天寧寺、五百羅漢
(2007年6月17日、経済経営研究所撮影)



MY ROOMS AT TENNENJI (天寧寺での私の部屋)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*,
New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

パーソンズが宿泊した、天寧寺に今も残っている「書院」。画の右下に、石橋の架かった「池」が描かれ、その池の周りにハナショウブが咲いている。



BUDDHA AND HIS DISCIPLES, TENNENJI (仏陀と弟子たち、天寧寺) Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

..... a pine-clad hill-side rising sharply beyond it. Just at the foot of this hill there was a rocky projection, covered with an undergrowth of azaleas, and spotted with statues of Buddha and his sixteen principal followers. These were rudely carved of the natural stone;

with their growth of lichens and mosses they looked as old as the rocks themselves, and were hardly to be distinguished from them at a little distance. Several stony zigzagging footpaths, mere tracks through the bushes and pine-trees, led to the top of the ridge,

十六羅漢像—— パーソンズ、ツツジに囲まれた石仏を描く



モチツツジ (2015年4月24日、彦根市荒神山、監修者撮影)

古庭の背後に屹立する山の斜面には、松林が広がっていた。そして、この山の麓のそこそこ、石が突き出していた。だが、よく眺めれば、それは仏陀と十六人の最高位の弟子たちの石像が立ち並んでいるのだった。それらの石像の足元は、ツツジの下生えで覆われていた。石像たちは自然石を粗く彫ったものだったが、地衣類や苔に包まれ、今ではもう自然の石そのもののように古色蒼然として見え、少し離れて眺めたときには、自然の石なのか石像なのかほとんど見分けがつかない。十六羅漢が立ち並ぶ斜面には、石ころだらけの九十九折の小道——それは叢林と松林のあいだを縫う踏み跡程度のものにすぎないのだが——が何本もあり、山の尾根の頂上まで通じていた。……



天寧寺、十六羅漢の石像 (2013年12月20日、経済経営研究所撮影)

7 頁の画の左下部分に描かれているのは満開のモチツツジである。パーソンズが楽々亭から天寧寺に宿替えするのを決めた最大の理由は、そこに「ツツジの花がたくさん咲いている」ことであっただから、このように勢いよく咲き誇ったツツジの花を天寧寺で実際に眼にすることができたことに画家はさぞ満足したにちがいない。

明るい色のモチツツジと、緑の苔に覆われた灰色の十六羅漢石仏群とを組み合わせたところが、この画の魅力といってよいだろう。

パーソンズは、1893 年にロンドンのファイン・アート・ソサエティでこの画を展示しているが、そのときに作成した「カタログ」の中で、この作品について自ら次のように書いている、「十六羅漢は、最も高い場所に座している彼らの師である仏陀によって統括され、まるで石のキノコが生え出ているかのように、ツツジの茂みの中から突き出している。ツツジは、庭の背後の岩だらけの斜面を覆うように茂っていた」と。



モチツツジは、静岡県・山梨県から岡山県までの本州と、四国に分布する。関西ではよく見かけるツツジである。丘陵地や低山地の明るい林内や林縁に生育する。花期は4月から6月頃までと長い。花弁は5枚で、濃紅色の細かな斑点が目だつ。花の萼や柄、葉などに触れるとモチのように少しべたつくのが、名の由来である。

モチツツジの花 (2010年5月22日、多賀町、監修者撮影)



THE BAMBOO GROVE, TENNENJI (天寧寺の竹林) Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

A little damp gully just behind the bamboo grove was full of deutzia bushes in blossom, and under them grew a clump of pale pink lilies (*Lilium krameri*), which seemed to me the loveliest flowers I had ever seen. The priest at Tennenji was so anxious to have some of my work that I made a drawing of these for him ; it hangs among the temple treasures,

ササユリ—— パーソンズ、最高に 愛らしい花と出逢う



ササユリの花 (2008 年 6 月 12 日、多賀町、監修者撮影)

竹林のすぐ後ろに、じめじめした小さな溝があり、そこで、こんもりと茂ったウツギの花が満開になっていた。そしてその下に、淡紅色のササユリ (*Lilium krameri*) が群れて咲いていた。ササユリは、私がこれまで見た中で最も愛らしい花のように思われた。天寧寺の住職は私の作品を一枚どうしても欲しいと言うので、私はこれらのササユリを描いた画を一点、彼のために贈呈した。その絵は堂内に、多くの寺宝の間に交じって掛けられている。

左頁の画中の右下に咲いているのが、パーソンズが「これまで見た中で最も愛らしい花 (the loveliest flowers I had ever seen)」と称えたササユリ (*Lilium krameri*) の花である。

ササユリは、淡紅色の大きな花弁と、笹に似た、すらりとした細長い葉をもち、佳香を放つ清楚可憐な花であり、パーソンズが最高に「愛らしい花」とであると記すのも頷ける。学名は *Lilium Japonicum* といい、まさに日本を代表するユリである。ササユリは、パーソンズが来日する 20 年ほど前の 1871 年に日本から英国のキュー植物園に送られ、その気品ある美しさが大変な評判を呼んで、当地の植物愛好家たちはササユリの球根を渴望した。そのような、手に入りがたい稀少な花が、明治 25 年当時の日本においては、初夏の時期、人家のすぐ近くに「群れて咲いて」いて、普通に見かけられる花だったのである。ササユリはもともと西日本地域に多く生育していた野草であり、天寧寺から少し離れた所に位置する多賀町では、ササユリが「町の花」となっている。多賀町では、ひとむかし前までは、初夏になると町内のあちこちで野生のササユリが可憐な美しい花を咲かせていたといわれるが、現在では生育環境の変化、里山の荒廃、心ない盗掘などが原因でその生息数は激減し、今では、かなり深い山などに入っていないと出逢うことが難しくなっている。

なお、パーソンズは、*Notes in Japan* の中では、ササユリの学名を *Lilium krameri* としている。この名は、明治初めに横浜で貿易商を営んでいた英国人 Kramer の名に因んだものである。Kramer 商会 (のち Jarman 商会) は、イギリスで熱狂的に愛好されていた日本産のユリの球根の輸出を行っていたが、ササユリを Kramer Lily と名付けてイギリスに送っていた。そのため、イギリスではササユリは長い間その名でも呼ばれていたのである。

なお、パーソンズが宗欽氏のために描いて献呈したササユリの画は、高木家のご子孫のお話によれば、その後長いあいだ高木家で大切に保管されていたが、21 世紀に入ってまもなく、事情があって失われてしまったという。

この画のタイトルは「天寧寺の竹林」となっている。「竹」は日本人にとっては人里でよく見かける馴染みのある植物である。しかし、竹の生育地はアジアのモンスーン地域と中南米にほぼ限られ、緯度の高いヨーロッパ地域では自生していなかった。パーソンズの時代には、ヨーロッパにおいては竹は滅多に見ることができない貴重な植物だったのである。それゆえ、植物を描く画家であるパーソンズにとって、ササユリだけでなく、竹もまた、強く興味を惹かれる題材だったのである (18 頁の A.B.Freemann-Mitford: The Bamboo Garden も参照)。



ササユリの花 (2014 年 6 月 16 日、多賀町、中川信子氏撮影)

The family, consisting of Sokin the father, O Shige San the mother, and Takaki, a son employed in the office of police at Hikone, soon adopted me as a friend, and did all they could to make me comfortable.
We made many excursions together, he, Matsuba, and I, strolling down to the town after dinner and looking in at the theatres and shops.

Our love of tobacco was a great bond of sympathy, although after trying each other's pipes we both preferred our own. The old man, who knew that I did not like to be watched while painting, would sit in his little room and gaze at me as I worked in the garden or among the stone gods on the hillside, and when he saw that my pipe was out, would fill another for me and bring it out with a box of matches, making this an excuse to look over my shoulder for a few minutes, and to have a little conversation.

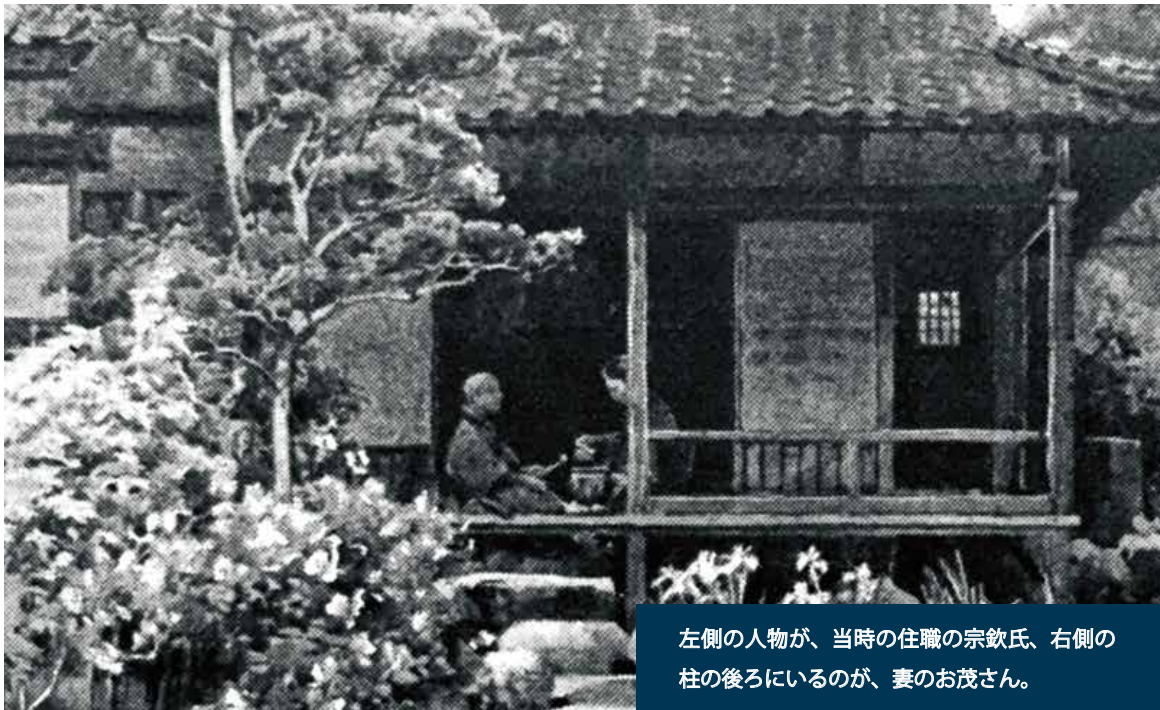
O Shige San was great at cooking, and took delight in providing me with

new and strange forms of food every evening;
When work was over and I had taken my hot bath and exchanged my suit of flannels for a cotton kimono, it was amusing to sit on the floor and speculate on the composition of the dishes which she brought me, trying with the aid if a dictionary to find out what they really were, and to acquire a taste for “daikon”. Among her successes were eels cooked in soy, broiled fish, and bean curd “à la brochette” ; young bamboo shoots, chrysanthemum leaves fried in batter, and lily bulbs boiled in sugar were eatable; but a sausage made of rice and herbs, and some of the quaint vegetables, were simply nauseous.
When the various dishes had all been brought in and arranged round me by the priest or Takaki, O Shige San would appear and kneel in front of me, keeping my sake cup and rice bowl filled, and watching with intense anxiety my expression as I tasted each compound,

パーソンズ、天寧寺の家族と交流する

寺の家族は、父の宗欽（Sokin）、母のお茂さん（O Shige San）、そして息子の高木（Takaki）の三人だった。息子の高木は彦根の警察署に勤めていた。家族はすぐに私を友人として温かく迎え入れ、三人とも、私が快適に過ごせるよう、できる限りの気遣いをしてくれるのだった。・・・
私たち、すなわち高木と松葉と私は、一緒によく遠出を行った。また夕食後、街へ下って、街中をぶらぶら歩いたり、いくつかの芝居小屋や商店を覗いたりもした。・・・
宗欽氏と私は、ふたりとも大のタバコ愛好家だったので、その点でも共感することが多かった。私たちはパイプとキセルを交換して試してみたが、双方とも、自分が普段使っているものの方がやはりよいということになるのだった。私が画を制作している間、他人に近くで見られるのを嫌がることを、老住職は知っていた。だから住職は自分の小部屋に座ってはいたのだが、そこから、私が庭園や、山の斜面に立っている石仏たちのところで仕事をしているのをずっと観察していた。そして私のパイプの火が消えたのを見て取ると、別のパイプをマッチ箱と一緒に私のところへ運んできて、それに新しくタバコを詰めてくれるのだった。しかしそれは口実で、本当は、ほんの数分の間とはいえ、私の肩越しに、私が何を描いているか見たかったのであり、私と少しでもいいから話をしたいのだった。・・・

お茂さんは料理がとても上手で、毎晩新しい見慣れぬ食べ物を私に供しては、そのことを喜んでくれるのだった。・・・
私は制作の仕事を終えると、熱い風呂に入り、フランネルの服から綿の着物（kimono）に着替える。そのあと畳の上に座って、彼女が私のところへ次から次へと運んでくる料理の正体を調べるのが、私には楽しみだった。私は、辞書の助けを借り、それらの料理が本当のところ何なのかを突きとめることに興じた。そのようにして私は大根（“daikon”）の味にも慣れるようになった。私がたいへんおいしく味わうことのできた料理には、鰻の蒲焼、焼き魚、豆腐の田楽があった。筍、バターで揚げた菊の葉、そして百合根の砂糖煮も食べることができたものだった。だが、米とハーブで出来たソーセージと、風変わりな野菜類のいくつかは、ただただ吐き気を催させるものだった。・・・
こうした様々な料理がすべて運び込まれ、住職あるいは高木の手によって私の周りに並べられると、お茂さんが現れ、いつも私の正面にやってきて跪いては、絶えず私の杯に酒を注いだり茶碗にご飯を盛ったりするのだった。そして、私が料理を一つ食べるたびに、それが私の口に合ったかどうか心配でたまらないといった表情をして、私の反応をじっと窺っているのだった。・・・

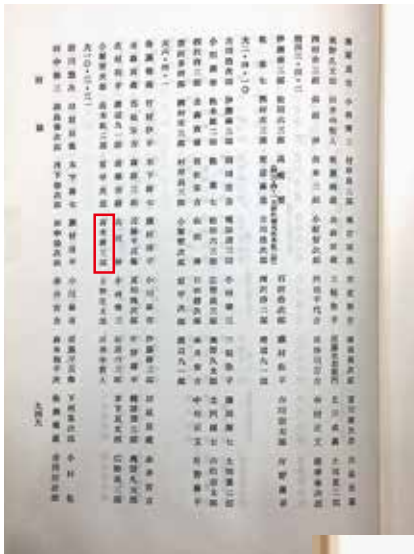


左側の人物が、当時の住職の宗欽氏、右側の柱の後ろにいるのが、妻のお茂さん。

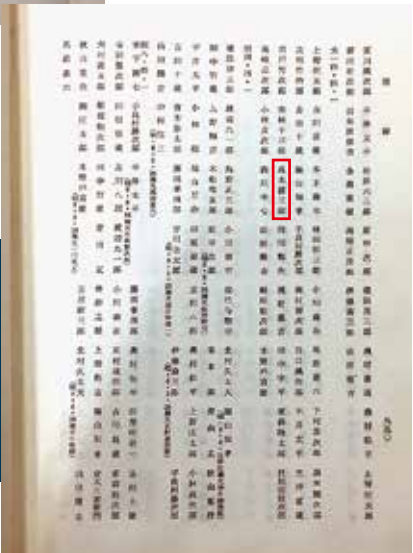
MY ROOMS AT TENNENJI（天寧寺での私の部屋）〔一部を拡大〕 Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.



▲出典：赤井安正『彦根町政秘史』、近江実業社、1927.



◀▼『彦根市史 下冊』、附録「歴代彦根町会議員」、彦根市役所、1964.



高木喜三郎氏は、明治3年に生まれ、昭和21年5月に77歳で亡くなっている。警察署に勤めていた喜三郎氏は、退職後、彦根町会議員を、大正6年4月から大正14年4月からの2期務めた。



HIKONE AND LAKE BIWA, FROM THE HILLS BEHIND TENNENJI (天寧寺の裏山から眺めた、彦根と琵琶湖)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

Several stony zigzagging footpaths, led to the top of the ridge, from which one looked down on fertile valleys enclosed by more pine-clad ridges, and to the westward on the great shining plain of Lake Biwa, its lagoons, islands, and distant mountains. Many times I walked to the top of this hill,

パーソンズ、天寧寺から琵琶湖を眺望する

十六羅漢が立ち並ぶ斜面には、石ころだらけの九十九折の小道……が何本もあり、山の尾根の頂上まで通じていた。頂上からは、この寺の裏山よりもっと多くの松が生えている尾根をもつ山〔訳注…城山や佐和山など〕と、それらの山のあいだに挟まれた沃野が見下ろされた。琵琶湖沿いの明るく輝く平野の西方には、いくつかの渚や島、遠くに聳える山々も望まれた。私は幾度となくこの山の頂上まで歩いて登った。

左側の小さな山が城山で、右側の大きな山が佐和山。2つの山の間に松原内湖が広がり、城山の前には彦根の町並みが見えている。琵琶湖対岸の湖西の山々の霞むシルエットも、遠方に望まれる。手前に描かれている植物は花を咲かせているモチツツジであるが、その他に松の幼木も見られる。現在、天寧寺の裏山（里根山）には背の高い広葉樹や竹、灌木など、様々な植物が雑然と生い茂っているが、パーソンズがやって来た明治25年には、今のように木々が立て込んでいなかったことが、この画を見ると分かる。視界を妨げる高木がなかった当時の裏山の頂きから眺望される琵琶湖側の高遠な景色は、実際素晴らしかったと想像される。



AZALEAS ON THE ROCKS, TENNENJI
(天寧寺の岩の上に咲くツツジ)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*,
New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

天寧寺に咲いていたツツジを描いたこの作品は、パーソンズが日本で制作した数多くの水彩画の中でも、明治中期以降、三宅克己、丸山晩霞、石井柏亭を初めとする日本の水彩画家たちに、とりわけ大きな影響を与えた作品の1つである。当時の日本人水彩画家たちは、この画から強い衝撃あるいは刺激を受けた。たとえば丸山晩霞は、「それは躑躅の咲けるものを主題として描いたもの……で、色彩麗はしく殆ど純写実的に見えるものをその通りに写生したものである。躑躅の細い枝叢の中にある蜘蛛

の巣まで描かれてあつた。……其頃西洋画と言へば暗い燦んだものゝやうに思つて居つたときこの鮮明な細かい純写実の画を見たのであるから驚かずにはゐられなかつたのである。日本の水彩画はパーソンズの感化も大いにある」（「水彩画の今昔」『みづゑ』135号、1916年5月）と述懐している。また、石井柏亭は「色彩が濃厚で華麗な精密な画であつた。……躑躅の花に蜘蛛の巣がかゝつて居る処まで書きぬいた細個條（デテール）描写には驚いた」（『我が水彩』中央美術社1913年）と述べたり、「日本に来遊した英国画家アルフレッド・パーソンズの画が横浜の或処に置かれて居る。それを態々見に行くなどのことがあつた。或庭に躑躅花が綺麗に咲いて居る、其葉のところどころにかけられた蜘蛛の巣まで精密に写してあることが我々を感心させた」（「日本の水絵」『みづゑ』308号、1930年10月）と回想している。天寧寺の岩の上に華麗に咲いていたツツジを「其葉のところどころにかけられた蜘蛛の巣まで精密に写してある」こと、すなわちパーソンズの水彩画の徹底的な「写実」性、その描写の「精密」さ・「鮮明」さ、そして「人間業とは思われぬ程」の「技巧の洗練」（三宅克己）——それらが、当時優秀な指導者を希求していた日本の若き水彩画家たちに及ぼした影響は甚大だった。日本の水彩画の発展・隆盛に決定的ともいえる役割を果たしたこの作品が、ほかならぬ天寧寺が舞台となつて描かれていることは、彦根の人々にもっと知られてよいことである。

It would have been easy to dream away months here, but the wise regulations of the Japanese government, foreseeing that the traveller might be tempted to neglect his duties and become a mere loafer, forced me to return to Kōbe and get a new passport, so I had to say good-bye to my friends, and the Rakkan with the lichen-covered

azaleas, still gay with crimson flowers which trailed round their feet, and the terrace where every evening I had watched the sun setting over Biwa, and to descend once more to the railway and the commonplace. The rain came down in torrents as I left the temple,

パーソンズ、天寧寺との別れ

「ここで何ヶ月ものあいだ夢の中にいるようにして過ごすことがきたらどんなに心地よいことだったろう。しかし、日本政府が定めていた規則により、私は新しいパスポートを取得するために神戸へ戻らざるをえなかった。旅行者というものは、放っておけば、どうしても義務を怠り、単なるのらくら者に墮してしまうのを、日本政府は賢くも見越しているのである。ともあれ、そういうわけで私は、天寧寺の友人たちと、昔とツツジで覆われた羅漢（ツツジの下に、深紅色の花が地面を這うように生育していたせいで、石仏の斜面はなおも華やかだった）と、そして毎夕太陽が琵琶湖に沈むのをそこから眺めたテラスに別れを告げねばならなかった。私は高台から再び日常的な世界へ、鉄道の走る平地へと降りていかなければならなかったのである。

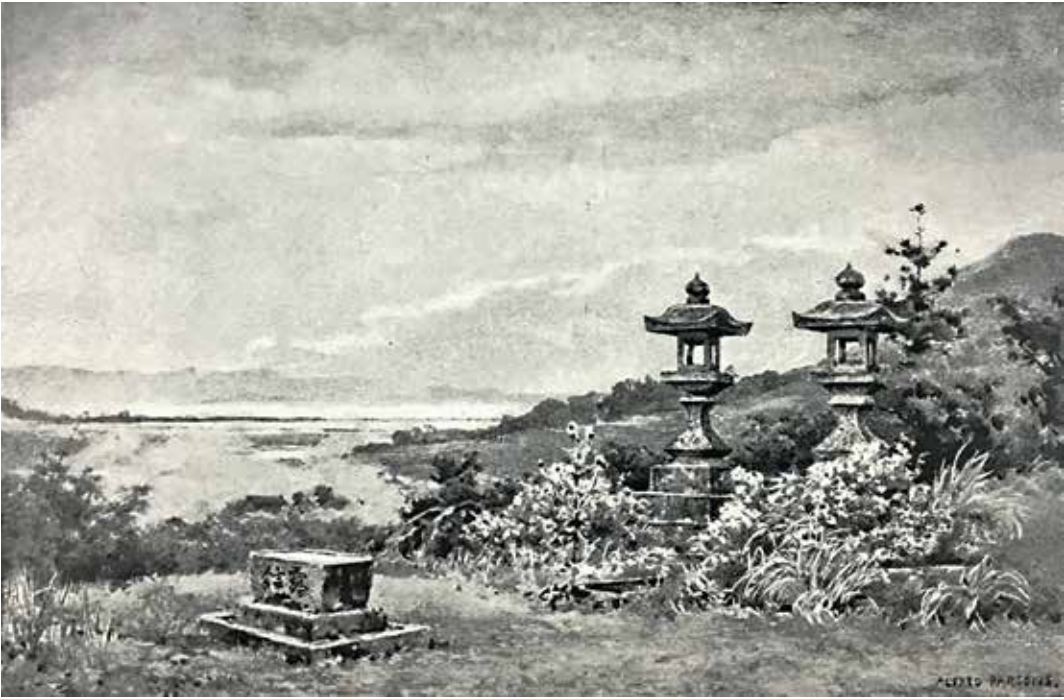
私が寺を去るときは、土砂降りの雨だった。……

Before I left Tennenji he wrote in one of my sketch-books the poem inscribed.....in Japanese characters. The reading is, “Yukuri no Omi no midzu-umi no fukaki kokoro wa chiyomo chigiran,” and it may be roughly translated thus: Deep as the water of Lake Biwa, my heart has been ever true and changeless since chance brought us together.

THE POEM (詩)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*,
New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.

私が天寧寺を去る前に、彼「訳注.. 住職の息子、高木喜三郎のこと」は私のスケッチブックの二つに、日本の文字で歌を一首揮毫してくれた。この読み方は、
“yukuri no Omi no midzu-umi no fukaki kokoro wa chiyomo chigiran”であり、
おおよその意味は「琵琶湖の水が深いように、私の心も永久に忠実で変わることがないだろう、機会があつて一度私たちが結びついたからには」というものだった。

ユケリナウ近江ノ湖水ノ
深キ心ワ千代も契ラン



SUNSET OVER LAKE BIWA, FROM TENNENJI (天寧寺から眺めた琵琶湖の夕日)
Alfred Parsons, *Notes in Japan*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896.



手前に、2基の灯籠と、「露結」と彫られた手水鉢が描かれ、右手の背後に佐和山、左には松原内湖、遙か遠くに琵琶湖西岸の霞む山並みが見えている。

2つある灯籠は、現在でも同じ場所に残っている。ただし、現在、両灯籠の後ろには行者堂が建っており（明治末頃以降の建立だとされる）、また灯籠の左横には数本の樹木が大きく育っているため、パーソンズがこの画を描く際に座っていたと推測される、灯籠の斜め前の位置からは、今では琵琶湖方向を広く眺め渡すことはできなくなっている。また、「露結」と彫られた石製の手水鉢は、現在は井伊直弼の供養塔の前へ移動している。

挿絵・その他—— パーソンズ、職業・画家



A Garden of Roses, Watercolours by Alfred Parsons, RA, Commentary by Graham Stuart Thomas, OBA, Salem House Publishers, 1987. (個人蔵)

イギリスの著名な園芸家エレン・ウィルモット Ellen Willmott (1858－1934) の *The Genua Rosa*, 1910－1914 (『バラ図譜』) のために、パーソンズは彼女の庭に咲いていた数多くのバラを描いている。バラ研究者 Graham Stuart Thomas がその中から 70 点を精選し、原画を忠実に再現した図版集として 1987 年に出版した。

パーソンズが描いたバラ図は、バラの種類ごとに、花卉や雄蕊・雌蕊、葉の表と裏、茎にある棘などを、植物学的に細部に至るまで精確に描いている。しかも、図鑑にありがちな、過度に解剖学的になることがなく、実にナチュラルに美しく表現されていることから、バラ愛好家たちから高く評価されている。



The Danube, From the Black Forest to the Black Sea, by F. D. Millet, Illustrated by the Author and Alfred Parsons, New York, Harper & Brothers, 1893. (滋賀大学附属図書館蔵)

1891 年の晩夏、パーソンズは、友人のアメリカ人画家フランシス・ディビス・ミレット (1846－1912) と旅行家・著述家のボルトニー・ビゲロー (1855－1954) の 3 人で、ドイツ南部の「シュヴァルツヴァルト (黒い森)」から、ドナウ河が海に注ぎ込む「黒海」河口まで船で旅をしたが、そのときの紀行文。この『ドナウ河紀行』を著したのはミレットであるが、挿絵は彼自身とパーソンズの二人が担当している。中央の写真の 3 人の男性は、左にパイプを銜えながら座っているのがパーソンズ、真ん中に立っているのがビゲロー、右側に腰掛けているのがミレットである。右の挿絵は、オーストリアのメルク修道院で、パーソンズが描いたもの。



A.B. Freeman-Mitford: The Bamboo Garden, London, Macmillan, 1896. (個人蔵)

本書は、禅宗庭園に深い関心を抱いていたミットフォードが、日本や中国、北米、ヒマラヤなどで見られる様々な種類の竹について研究した成果を纏めたもの。書中に収められた竹の絵をパーソンズが描いている。

フリーマン＝ミットフォード (1837－1916) は、英国の外交官・政治家・著述家。イギリス公使館書記官として 1866 年から 1870 年まで日本に滞在し、明治維新前後における日本との外交交渉で重要な役割を果たした。日本に関する著作がいくつかあり、*Memories by Lord Redesdale*, London, Hutchinson & Co., 1915 (長岡祥三訳『英国外交官の見た幕末維新』〔抄訳〕講談社学術文庫、1998 年)、*Tales of Old Japan*, London, Macmillan, 1871, *The Garter Mission to Japan*, London, Macmillan, 1906 (長岡祥三訳『英国貴族の見た明治日本』〔抄訳〕新人物往来社、1986 年) などがよく知られている。



アルフレッド・パーソンズの肖像写真 (市田左右太撮影) のレプリカ (滋賀大学経済学部附属史料館蔵)

パーソンズが来日した明治 25 年に市田^{そうた}左右太 (1843－1896) によって撮影された写真。市田は明治時代に活躍した著名な写真師で、神戸の元町に洋館の写真館を構えていた。これまでパーソンズについての文献資料等でこの写真が掲載されたことはない、貴重な写真である。この写真のオリジナルは、天寧寺でパーソンズが親交を結んだ高木喜三郎家が所有していたが、「水彩画家 アルフレッド パーソンの事」(1953 年) という論文を発表した元滋賀県立短期大学教授の故島戸繁氏が、高木氏の家族から許可を得て、高木家にあったパーソンズの肖像写真を撮影 (複写) したと推察される。このレプリカの写真は、島戸氏のご子息から本学経済学部附属史料館に寄贈されている。